

コスプレ

今月の18、19の両日、洞爺湖町では、昨年に引き続き、コスプレ愛好者が温泉街を歩く「TOYAKOマンガアニメフェスタ」が開催されます。

今年は歩行者天国を新設するほかメイド喫茶も登場するそうです。昨年も全国から沢山のコスプレ愛好者が集まり驚かされましたが、主催者によると、今年は昨年より2千人多い5千人の来場を見込んでいるとのこと。

コスプレの愛好者は、東京の原宿辺りを歩くと必ずとっていい程目に付きます。初めてコスプレヤーを目にした時は、驚くというより、頭が少しおかしいのではと思ったものです。誠に失礼いたしました・・・。

今では、札幌市内でもコスプレヤーを見かけるようになりましたので、いちいち驚いてばかりはられません。

ただ、愛好者の方々には申し訳ないけれども、私がこれまで目にしてきたコスプレは、どうも暑苦しいというか、こってり感が強すぎて馴染めません。もっとも、こんな事をいっていると、若い人からは「KY」とか「古い」、「センス悪う～」といったヤジが飛んできそうです。

勿論、私のようなものでも、今では和製英語である「Cosplay」が世界で通用する言葉になっているように、コスプレは世界の若者に影響を与えている日本発の文化の一つである、と認識してはいます。ただ、ついていけないだけです。

コスプレは、アニメやゲームのキャラクターに扮する行為ですが、こうした変身願望というのは、何も若者達に限ったことではありません。昔から、地域のお祭りなどでは、大人達による「天狗」や「鬼」、「山の神」などへの変身が行われていることでも分かります。また、アメリカではハロウィンでの仮装は伝統ですが、こうした変身は世界中のどこでも行われていることです。

今よりもっと「強くなりたい」とか「美しくなりたい」といった、今の自分とは違った者になりたいという願望は、人間が本能的に持っているものなので

はないでしょうか。

幼い子どもたちが、アニメのヒーローのようになりたい、お姫様のようになりたいといった変身願望は可愛いものですが、成長の過程で現実との折り合いを付けながら大人になっていくのだと思っています。ですから、大人になって、なおアニメのキャラクターのようになりたい、また、そのように振る舞うという行為を見た時、私は戸惑いと同時に、現実との折り合いができていない、もしくは現実逃避なのではないかと感じたこともあります。ただ、最近では、現実から逃避しようとしている若者もいるかも知れませんが、むしろコスプレイヤーの多くは、自己表現の一つとして意図的にパフォーマンスしているのではないかと感じています。一人ひとりの置かれている環境や感性、変身願望の強さなどによって表現方法は違いますが、コスプレイヤーはそれを押し通していくだけのエネルギーを内包している、と思っています。「そのエネルギーをもっと建設的なものに向けたら」というのは、おじさんの要らざる戯言、余計なお世話というべきでしょう。彼らのエネルギーは、今や地域活性化の起爆剤にさえなっているのですから。

「TOYAKOマンガアニメフェスタ」の主催者は、「洞爺湖の良さを伝えながら一大イベントに育てたい」と意気込んでいるようですが、良いところに目を付けたものだと感心しています。（塾頭 吉田 洋一）